
銀河英雄年代史外伝 ケリム星域遭遇戦

雨霧颯太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀河英雄年代史外伝 ケリム星域遭遇戦

【Nコード】

N2151J

【作者名】

雨霧颯太

【あらすじ】

銀河帝国軍辺境星域警備艦隊司令官、ヴェルナー・テンシュテットは商船隊からの救難信号を受け、現場宙域に急行する。そこにいたのは、「海賊騎士」の異名を取る宇宙海賊サー・ドレイクだった。自軍の倍する兵力を持つドレイクにヴェルナーは……。

銀河英雄伝説の本格二次創作！ 銀河英雄年代史外伝シリーズ！
第三作目！

第一話

新帝国暦二一年一月二〇日午後二時三〇分　ヴェルナー・テンシュ
テット大佐率いるバーラト星系警備艦隊第六戦隊五〇〇隻はケリム
星域からバーラト星系へ向かう商船隊からの救難信号をキャッチし
た。

先のケルン占領以後、大規模だった反乱はなかったものの、通商路
を狙った海賊行為はあとをたたなかつた。

「まったく、毎度毎度嫌になるわ。何度痛めつけられれば懲りるのかし
ら」

艦隊参謀長のナオ・リヒテンシュタイン中佐が腕組みをして言った。

「確かに同感だが、彼らにしてみれば生きるために必要な行為だ。
頭から否定することは出来ないさ」

艦隊司令官のヴェルナー・テンシュテットは言った。

「あら？やけに連中の肩を持つのね。ヴェルナー」

ナオは意外という顔をして、指揮シートに座った一歳年少の黒髪の
司令官に言った。

「まあね。海賊に片足を突っ込みかけてる相棒がそばにいるからね」
おどけて言ったヴェルナーであったが、その代償は計り知れないも
のだった。彼の頭上からナオのげんこつが降り注いだのである。並

の男五、六人を相手にしておつりが来るほどの腕っ節を誇る鉄腕リヒテンシュタインの鉄拳である。ヴェルナーは想像を絶する痛みにのたうち回りながら、ナオに抗議した。

「痛いな！ 参謀長！！ こぶが出来るだろうが！！」

ナオは手に腰をあててふんぞり返った。

「あら、乙女の純情を傷つけた罰よ」

「まったく……三十路過ぎて何が乙女だよ……」

艦橋にいたものは例え遮音防壁越しでもナオの堪忍袋の緒がキレた音が聞こえたであろう。オペレーターたちは艦橋内の空気が絶対零度に近い温度に下がるのを感じた。その次の瞬間にはヴェルナーの悲鳴が聞こえて来た。

「ふふふ。これが楽しみだから、この艦隊は辞められないわ」

オペレーターの一人が言った。

「艦橋名物、司令官と参謀長の夫婦漫才ってね。艦長をしてみるよ。また胃薬飲んでるよ」

もう一人のオペレーターが言った。緊張が少しだけ和らいだが、コンソールに映し出された反応を見て再び顔色が変わった。

「夫婦漫才中失礼します！」

「誰が夫婦漫才だ！！」

2人は声を揃えていったが、意に介せずオペレーターは続けた。

「海賊の出現宙域に到達しました。映像を出します」

「わかった。見せてくれ」

サターンの全天周モニターに映像が映し出された。救難信号が発進されて、ヴェルナー艦隊が到着するまでの1時間あまり、海賊艦隊がまだ当該宙域におり、輸送船団の物資を略奪している様子が映し出されていた。

「ひどい……」

無惨に破壊された輸送船や武装商船を見て、ナオは口を押さえた。

「直ちに救助に向かい、海賊を駆逐する。全艦、戦闘準備」

ヴェルナーはすかさず指令を下した。

「全艦、戦闘準備。砲撃戦および対空戦用意」

「ワルキューレ隊、発進準備」

ヴェルナー指揮のもと、海賊に対しただちに戦闘準備がとられた。

「艦隊陣形を凸形陣にとれ。それから、他の部隊に応援要請と病院船の手配を」

ヴェルナーたちが戦闘準備に追われる中、海賊側から通信が入って

来た。

第二話

「何のつもりかしら」

ナオは首を傾げた。

「さあ、とにかく話をしてみないとわからない。回線をつないでくれ」

回線をつなぐと、ヴェルナーと同年くらいの若々しい貴公子然とした黒髪的美青年が映し出された。

「私は、サー・ドレイク。この海賊の首魁である。艦隊司令官に降伏をすすめるべく、こうして通信をつないでいる」

肩までのびた長い黒髪を煌めかせた若き海賊提督は威風堂々と言う言葉がそのままではまると言った態度で話した。ナオがその態度に憤慨し、金色の髪を逆立たせてドレイクに一言言おうとした瞬間、ヴェルナーはナオを制止した。

「本職は、バーラト星系警備艦隊第六戦隊司令官、ヴェルナー・テシシュテット大佐です。『海賊騎士』ヘル・ドレイクにまみえることが出来て光栄です」

サー・ドレイクはこの年三十歳。本名はウィルヘルム・フォン・アウブスブルグと言った。旧帝国時代の門閥貴族の家に生まれ、幼年学校入学前、リップシュタット戦役において生家が没落、以後、苦学しながら士官学校を卒業、武勲著しく、数年で大佐に昇進、バーラト星系の宇宙海賊を討伐中、海賊が自分の生家の側近の者と知り、

その懇請を受け、海賊の頭目になった。彼率いる海賊団は彼の統制された指揮によって帝国艦隊を圧倒。無抵抗の者には危害を加えず、その堂々とした闘いぶりから「海賊騎士」とあだ名され、市民からも人気を集めていた。

「見たところ卿の兵力は五〇〇。こちらは一〇〇〇。明らかに分が悪い。無益な戦闘は好まぬ。降伏されよ」

尊大に思える言葉も、尊大には思えぬ。先帝ラインハルトならば、厚く遇したであろう。ヴェルナーは、そう考えると少し苦笑した。

「サー・ドレイク。我々も武人の端くれです。市民に危害を加えた者を置いて逃げ出したとあつては我々の名折れです。商船の救助もあります。申し出には応じられません」

「わかった。致し方あるまい」

そう言うと、ドレイクは通信を切った。ヴェルナーは傍らのナオの方を向くと言った。

「参謀長、艦隊の中から五〇隻を残りの輸送船団の防衛と、生存者の救助にあたらせる。残りはドレイクとの戦闘を行う」

「相手は、あのドレイク。しかも兵力はこちらの二倍。勝てるの？ ヴェルナー？」

「そう思うから、その表情なんだろう？ ナオさん」

ヴェルナーは聞き返した。ナオの顔は自信にあふれていた。

「もちろん。我々はそれが得意技ですから」

第三話

新帝国暦二一年一月二十日午後四時、海賊ドレイクと、ヴェルナー艦隊との戦端が開かれようとしていた。参加兵力はドレイク側一〇六〇隻、約一〇万人、対するヴェルナー艦隊は四五〇隻、将兵五万一〇二〇人であった。

ヴェルナー艦隊は密集隊形をとると、突撃をかけた。ドレイク艦隊とヴェルナー艦隊の間隙がみるうちに狭くなっていく。モニター越しに見える星々が線を描きながら後ろに流れていくのをナオは見た。

「まず、突撃か。思ったほど芸が無いな。全艦、斜線陣をとり、右から左へ力を受け流す」

ドレイクはヴェルナー艦隊の突撃に合わせて艦隊右翼の兵力を厚くさせると、斜線陣をしいた。

「こちらには長距離砲が少ない。よく狙って沈めろよ」

ヴェルナーは艦橋から指示を出した。

「司令官、まもなく射程に入ります」

オペレーターの報告の後、ヴェルナーは右手を上げた。

「砲撃戦、用意」

かのヤン・ウェンリーならば、帽子を直したであろう。ヴェルナー

は眼鏡をかけ直すと、再度右手を上げ、一気に振り下ろした。

「ファイエル!!」

中性子ビームとおびただしい数のミサイルが一斉に発射された。

「ファイエル!」

ドレイク側でも、ほぼ同時に砲撃が開始された。互いの中性子ビームが交差し、いくつもの光芒が生まれた。だが、むしろ被害の多かったのはドレイク側であった。ヴェルナー艦隊の精密な砲撃の前に、ドレイクの先陣は甚大な被害を被っていた。

「なんとという正確で、しかも効率の良い射撃だ。……左翼を前進、半月状に敵艦隊を包囲する」

ドレイクは右翼に被害と注意を引き受けると同時に、左翼を前進し、ヴェルナー艦隊を半包囲態勢にしようと考えた。用兵家としての彼の手腕は帝国の正規軍の提督のそれと何ら遜色は無く、むしろそれを凌駕していた。彼率いる海賊艦隊は整然と前進し、その包囲の網を閉じつつあった。

左翼に動きがあったと同時に、ヴェルナー艦隊の後衛を守っていたアジェナ艦長、アルベルト・フォン・ビスマルク中佐から連絡が入って来た。

第四話

「先輩。元気ですか？」

「ああ、退屈はしていないな」

戦闘中、不謹慎極まる会話であるが、挨拶はこのときどうでもよかった。アルベルトはヴェルナーの士官学校時代の後輩であり、艦隊指揮においても、ヴェルナーの半身とも言つべき存在だった。アルベルトはヴェルナーにおどけながら言った。

「先輩、俺、今、退屈しているんですが……」

ヴェルナーはモニターを見た。敵の意図と、アルベルトの言わんとしていることを察すると、にやりと笑った。

「わかった。ちょっと右に出て、暴れてくれ」

それだけで、長年の先輩後輩の意思疎通は十分だった。アジエナ以下後衛六〇隻は、艦隊の右翼に出ると、突出したドレイク艦隊左翼に痛撃を与えた。

「ヴェルナー・テンシュテットばかりがヴェルナー・サーカスを使えると思ったら大間違いだと奴らに知らせてやろう！ 撃てえ！！」

ミサイルと中性子ビームの大群が突出した部隊に襲いかかった。ひと際突出した部隊約五〇隻あまりが、一瞬にして火球と化して消滅した。

「やはり、先輩が考えたヴェルナー・サーカスは完璧だ。攻守に渡って通用出来る」

アルベルトは腕を振ってガッツポーズした。ヴェルナー・テンシュテットが考案したヴェルナー・サーカスは複雑きわまりない戦術である。艦同士の手打ちをせず、しかも弾幕射撃を行う危険な戦術を艦隊レベルで完璧に再現出来た艦隊司令官はわずか四人しか存在しない。一人は考案者のヴェルナー。そして、艦隊参謀長であり、後に分艦隊司令官になるナオ・リヒテンシュタイン、アジエナ艦長のアルベルト・フォン・ビスマルク。そして、ヴェルナーの師匠であるバーラト星系自治政府軍統合戦本部戦術研究部長、ハーヴェイ・ウォールバンガー中将だけであった。

「なかなかやる……敵も曲者という訳だな」

ドレイクはヴェルナーの大胆かつ巧緻な用兵に嘆息した。敵に倍する兵力を持ちながら、その兵力でこり押しすることが出来なかった。ヴェルナーは敵の足を食い止め、輸送船団を後方の安全宙域まで離脱させるために時間をかけることに腐心していた。故に、敵先鋒にのみ攻撃を集中させ、攻撃の出足を挫くことでドレイク側の大半の兵力を遊兵にさせることに成功させていた。

しかし、大規模輸送船団は、ドレイクにしてみれば大きな獲物であり、それを逃がすことは今後の彼の活動にも影響を与えるものだった。

戦闘開始からほぼ二時間が経過した午後六時、戦線は微妙に膠着していた。ドレイク艦隊主力はヴェルナー艦隊主力の攻撃を防ぎ、ドレイク艦隊左翼はヴェルナー艦隊右翼に攻撃を与えていた。双方どちらも攻守に渡って均衡しており、どちらも攻めあぐねている様相

を呈していた。

「さて、そろそろね」

ヴェルナー艦隊参謀長、ナオ・リヒテンシュタイン中佐が腕時計を見た。ヴェルナー艦隊の奥の手がその配置を終えつつあった。

第五話

「膠着状態が長く続いておりまずぞ。若。ここは中軍を出して敵を蹴散らしてはいかがでしょう」

ドレイクの参謀、テオドル・アルペンハイムが言った。ドレイクを海賊の世界に引きずり込んだ人物である。

「うむ……じいの言う通りだな。先鋒を後ろに下げよ。フアランクスで敵を粉碎する」

先鋒部隊がゆつくりと動き始めた。ヴェルナーが執拗に攻撃を加えたため、艦隊自体の動きは鈍くなり、ドレイクの意図した程早い艦隊運動ができなかったのである。

「遅いな……」

ドレイクがそうつぶやいた瞬間、後ろから衝撃が襲いかかった。艦隊の背後がワルキューレによる攻撃を受けたのである。

「編隊全機。俺たちは戦艦だ。ヴェルナー艦隊の大砲だ。戦艦や大砲が戦艦を沈められないなんて不名誉をかぶるな。一艦のこらず沈めてしまえ!!」

ヴェルナー艦隊空戦隊長、エーリッヒ・フォン・アデナウアー少佐が自分の指揮する部隊に檄を飛ばした。アデナウアー機は自分の機体に塗られた赤いストライプを煌めかせ、敵後衛部隊に襲いかかった。

「まずは、一隻!!」

濃密な対空砲火をもとせず、彼は巡航艦を一瞬にして血祭りに上げた。

ナオが戦闘開始前、ヴェルナーに提案した戦術はまず、ヴェルナー艦隊本隊が敵艦隊主力を引きつけ、その間にワルキューレ部隊が敵艦隊背後に進出し、攻撃を与えた後、乱戦状態に持ち込んで敵の退却を誘うというものであった。この戦術はナオが士官学校時代、ヴェルナーをきりきり舞いさせた戦術を発展させたものであり、いったん捕まってしまうと、脱出は困難であった。

実際、ナオの予測通りにワルキューレ部隊は敵陣深く切り込み、中軍すらもその艦列を崩し始めていた。

「……道化師が。遊びは終わりだ！ 全艦密集隊形!!」

ヴェルナー艦隊は終止戦闘宙域を支配していたが、ついにドレイク艦隊が物量にまかせ、全面攻勢を開始した。それはヴェルナーとナオがもつとも恐れていた攻撃だった。

「突撃!!」

ヴェルナーもドレイクの突撃に備えてはいたが、圧倒的にドレイクの突撃が早く、しかもその砲火が激烈であり、ヴェルナーの指揮する兵力も残り三五〇隻をきっていたため、たちまちのうちに戦線は瓦解した。ヴェルナー艦隊は左右に分断されてしまった。

第六話

「やられた!!」

ヴェルナーは指揮シートから立ち上がった。

「直撃来ます!!」

オペレーターの報告が早いのか、サターンの機関部に直撃弾が命中し、大きな振動がヴェルナーたちを襲った。

「第一、第二機関部、大破!!」

「すぐに切り離せ!!」

サターン艦長のミハイル・ブラウン中佐が即断した。サターンはこれによって機動力を喪失し、艦としての運動がほぼ不可能になったが、この判断がなければ、ヴェルナーもナオもそして、サターンも宇宙の塵となっていただろう。だが、サターンの危機はこれだけに終わらなかった。

「敵艦、真正面!!」

機関部が使い物にならなくなったサターンは最早瀕死の状態だった。目の前の巡航艦がヴェルナーにはヴァルハラのように見えた。

「ナオさん!!」

ヴェルナーはナオの名前を呼んだ。ヴェルナーは傍らのナオを一瞬

見つめ、すまない、11年前の誓いを守れそうにないと心の中で謝った。敵艦の中性子ビーム砲が煌めいたその時、敵艦が爆発した。

「司令官！ 無事ですか！！」

アデナウアー率いる空戦隊がドレイク艦隊に追いついた。空戦隊はドレイク艦隊の背後を再度攻撃したが、いかんせんこちらも数を減らされており、大した損害を与えることが出来なかった。ヴェルナー艦隊は戦線を維持することも不可能になり、あとは殲滅されるだけに思われた。だが、ドレイク艦隊はそのまま、逃走を図ってヴェルナー艦隊から離れていった。次の瞬間、ヴェルナー艦隊の真正面に三〇〇隻もの艦隊が現れた。ヴェルナーからの応援要請を受けた、バーラト自治政府軍のラオ中将率いる艦隊が救援に現れたのだった。

「この損害では追撃戦は無理ですね」

ブラウンはヴェルナーに言った。

「ああ、そうだな。直ちに帰投しよう。それからアルベルトを呼んでくれ」

直ちにアジェナ艦長のアルベルトが呼ばれた。モニター越しにアルベルトは敬礼した。

「サターンが大破して満足に動けない。済まないが基地まで引つ張っていつてくれ」

ヴェルナーが後輩に頼むと、アルベルトは破顔して言った。

「お任せください。酔った先輩を送り届けるのは士官学校時代から僕の役目でしたからね。お安い御用です」

ナオとヴェルナーはお互いを見合わせ笑った。アルベルトはそれではと通信を切った。

「恐るべき敵だった。あのまま戦っていたら、俺たちは間違いなく死んでいた」

「ええ……そうね。私達ももつと戦い方を考えないといけないわ」

ナオとヴェルナーはそれぞれ、海賊騎士との闘いを反芻していた。二人は尊敬と脅威に値する敵を同時に得たのであった。そして、彼が特務艦隊としてバーラト星系を離れるまで、幾度となく、ドレイクとの激戦を繰り広げていくのである。

ドレイクもまた、自身の旗艦の中で、道化師とあだ名したヴェルナーのことを思い出していた。

「大した敵だった。今まで戦った帝国軍のだれよりも強かった」

「若……ご機嫌のようすな」

側近のテオドルが言った。ドレイクは少し笑って言った。

「ふ……顔に出ってしまったか。また、戦場で相見えるのが楽しみだ。今回は邪魔が入ったが、次はヤツをしとめてやろう」

こうして、新帝国暦二二年一月二十日、俗に言うケリム星域遭遇戦は双方退却という結果で幕を閉じた。ドレイクとヴェルナー、二人

の闘いは続いていく……

第六話（後書き）

ついに現れたヴェルナーの好敵手。
次回作にも登場します。

次の銀河英雄年代史外伝シリーズをお楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2151j/>

銀河英雄年代史外伝 ケリム星域遭遇戦

2010年10月10日22時20分発行